

カンボジア国内における日本語教師対象 『いろどり 生活の日本語』研修 —同期型と非同期型を複合した研修デザイナー—

栢丸華緒

1. はじめに

2020年度に『いろどり 生活の日本語』⁽¹⁾ (以下、『いろどり』) クメール語版が公開されて以来、国際交流基金プノンペン連絡事務所 (以下、JF プノンペン) では、「特定技能」外国人材向けの日本語事業⁽²⁾の一環として『いろどり』の普及、定着を目指して日本語教育機関 (以下、機関) への訪問や授業運営を支援するためのマテリアルの作成、セミナーの実施などを行っている。2020年度は『いろどり』に関する広報を中心に活動し、2021年度は普及活動の一環として『いろどり』授業サポートプログラム (以下、サポートプログラム) という、機関を対象とするサポートを行った。大学や送り出し機関などへの訪問、オンラインでのヒアリングを行っていく中で、『いろどり』は日本へ行ったことがないカンボジア人教師でも日本の生活がイメージしやすく、音声教材も多いので教えやすいという肯定的な意見が多くあった。一方で、『いろどり』の特徴の一つである課題遂行型の授業に関する理解が曖昧であるがゆえに、今まで使用していた文型積み上げ型の教材を使った授業の方法と同じようになってしまうという声も挙がった。

このような背景から、2022年度は『いろどり』という教材をよく理解し、特徴に合わせて授業ができる先生である「いろどり先生」の普及と定着を目指し、JF プノンペンでは初めての試みである日本語教師対象の『いろどり』研修を実施することとした。

本稿では、JF プノンペンのこれまでの『いろどり』に関する普及活動をふり返ったうえで、『いろどり』研修の概要とその成果、課題について報告する。

2. カンボジア国内における『いろどり』の普及

本章では、『いろどり』研修の実施に至るまでの経緯を、カンボジア国内における日本語教育の現状やこれまで JF プノンペンが行ってきた試みを踏まえて記述する。

国際交流基金が刊行している課題遂行型の日本語教材には『まるごと 日本のことばと文化』があるが、この教材にはカンボジアの公用語であるクメール語版はなく、またカンボジア国内で手に入れることは簡単ではない。よって、クメール語版がありウェブ上で自由にダウン

ロードが可能である『いろどり』は、カンボジア国内で簡単に入手できる初めての課題遂行型の日本語教材だと言えるだろう。

2.1 『いろどり』授業サポートプログラムの実施と見出された課題

2021年度に普及活動の一環として申込み制のサポートプログラムを実施した。対象は、カンボジア国内の機関であり、申込みは申請書と『いろどり』の特徴に合わせた授業（以下、『いろどり』授業）を行うためのカリキュラム案の提出を条件とした。大学や送り出し機関、日本語学校を含め、全11機関がサポートプログラムに加入した。なお、申込みは上半期と下半期に分けて2回行い、1度申込みば通年でサポートが受けられることとした。

主なサポート内容は、JF プノンペンが制作した『いろどり』製本版とマテリアルの提供、授業運営のための教師研修である。マテリアルとは、

『いろどり』授業を効果的に行うための副教材である。サポートプログラムに加入した機関限定で、授業運営のためのスライド教材やテストグッズ等を提供した。限定とした理由は、作成したマテリアルの効果を検証するためである。これらのマテリアルは、サポートプログラムに加入した全11機関に行ったアンケートの結果をもとに一部修正し、2022年4月に一般公開³⁾した(図1)。また、教師研修は『いろどり』の概要説明や『いろどり』の使い方をレクチャーするセミナー、『いろどり』授業を実際に受けてもらう体験授業、そしてJF プノンペンの講師が授業見学後に行うフィードバックなど、状況に合わせて対面とオンライン⁴⁾で実施した。

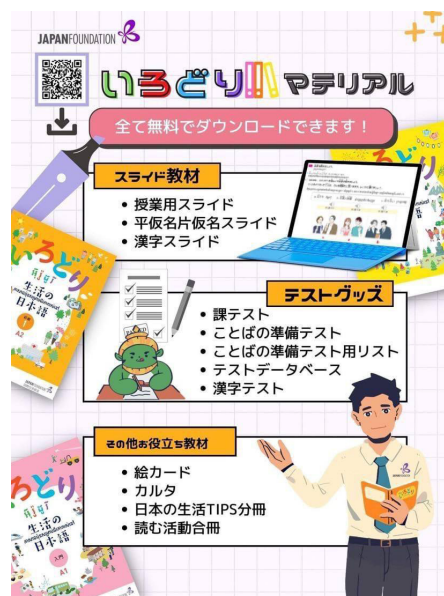


図1 『いろどり』マテリアル (JF プノンペンの公式Facebookより)

サポートプログラムを通してヒアリングを行っていく中で、日本人教師、カンボジア人教師問わず、『いろどり』の課題遂行型の授業に不安を抱えている教師が一定数いることがわかった。その理由の1つとして、加入しているすべての機関が『いろどり』導入前まで文型積み上げ型の日本語教材を主教材として使用していたことが挙げられる。また、カンボジア国内では、文型積み上げ型の授業で日本語を習得してきたというカンボジア人教師が過半数を占めている。そのため、文型や語彙を覚えることに重きを置いた授業のイメージはできるが、自身が受けたことがない課題遂行型の授業はイメージし難いのである。ゆえに、同じ職場の教師同士も異なる教え方で独自に授業を実践していたり、教師間で研修の参加回数が異なるため情報や教え方に差が生じたりと、『いろどり』の授業をサポートするうえで課題も明らかになった。更に、カンボジア人教師の日本語運用力はN3レベル相当が多く、なかには日本語教師としてスキル

アップしたい気持ちはあるが、日本語運用力に自信がないがゆえに、カンボジア国内で定期的に行われている日本語教師対象のセミナーへの参加を躊躇している教師も見受けられた。

サポートプログラムは、当初から1年間限定の計画であったため2022年3月31日で終了となった。浮き彫りとなった課題を受けて、『いろどり』の特徴の1つである課題遂行型の授業に関する理解を深めることと日本語教師として授業を運営するために必要な基礎を養うことの2点を念頭に置いた研修を行う必要性を感じ、2022年度は、教師研修を実施することとした。

3. 『いろどり』研修の概要

筆者は、第2章で述べたように2022年度の試みとして、カンボジア国内における日本語教師を対象として、『いろどり』の特徴の一つである課題遂行型の授業に関する理解を深めることと日本語教師としての基礎を養うことの2点を念頭に置いた研修を企画した。研修名は「いろどり先生 A 研修」（以下、A 研修）と A 研修受講修了者の次のステップとなる「いろどり先生 B 研修」（以下、B 研修）である。なお、A 研修と B 研修における日本語教師としての基礎とは、コースデザインから授業運営までできることとする。

図2は研修の実施フローである。A 研修の目標は、「いろどり先生」としての基礎を身につけることである。具体的には、『いろどり』の課題遂行型の授業を理解し、授業の組み立てができること、『いろどり』のマテリアルを使って効果的に授業運営が

	6月～7月	8月～10月	11月～1月
A研修 基礎を身につける (授業のデザイン)	第1期	第2期	
B研修 応用を身につける (コースデザイン)		第1期	第2期

図2 研修の実施フロー

できることである。B 研修に関しては、A 研修を修了した受講生の次のステップとなる研修を想定しているため、対象は A 研修受講修了者となる。B 研修の目標は、『いろどり』の特徴をよく理解したうえで、教育現場に合わせてアレンジができる『いろどり』大先生としての応用力を身につけることであり、『いろどり』を効果的に使用してコース運営ができる力を養う。

研修の最終課題として A 研修は受講生の教育現場を想定した『いろどり』授業教案の提出、B 研修は『いろどり』コース案とカリキュラム案の提出を課す。

A 研修と B 研修は、筆者を含む研修運営チーム4名で行う。筆者が講師となり、JF プノンペンのカンボジア人講師がクメール語通訳として入る。よって、使用する言語は日本語とクメール語の2言語である。応募要件は、カンボジア国内在住の日本語教師であることと、日本語能力試験 N3 レベル程度の日本語運用力を有する人とした。

期間は A 研修、B 研修ともに約2か月間で、2期ずつの実施を想定した。研修形態は、各受講生が期日内に動画を視聴しクイズに回答する非同期型とオンタイム（Zoom 1回、対面2回）で行う同期型の複合型で実施する。対面研修は、受講生がプノンペン都カシェムリアップ州の

いずれかを選択する。

なお、受講修了認定要件として A、B 研修ともに 3 つを定めた。1 つ目は非同期型研修における課題達成率が 80% 以上、2 つ目は同期型研修 3 回すべてへの出席、3 つ目は研修の最終課題における課題達成率が 80% 以上である。受講修了認定要件のすべてを満たした受講生には受講修了証を発行する。

4. 第 1 期 A 研修実施

第 1 期 A 研修（以下、本研修）は、2022年 6 月 2 日から 7 月 31 日にかけて行った。本研修の目標は、図 2 の通り「いろどり先生」としての基礎を身につけることである。具体的には、『いろどり』の特徴の一つである課題遂行型の授業を理解し、授業の組み立てができることである。そして『いろどり』のマテリアルを使って効果的に授業運営ができることと定めた。以下、本研修開始前から終了までの内容とスケジュール、受講生等について説明する。

4.1 受講生の募集告知から研修初日まで

本研修の受講生の募集告知は、JF プノンペンの公式 Facebook やカンボジア日本語教師会のメーリングリストを使用して行い、16 名で実施することとなった（表 1）。16 名のうち、『いろどり』教授経験がある受講生は 11 名いる。更に、11 名のうち 10 名が 2021 年度サポートプログラム加入者である（表 1）。なお、内容を問わず、日本語教育に関するセミナーや研修への参加経験がない受講生が 5 名含まれる。研修初日である開講式は、6 月 2 日に Zoom にて行い、同日から非同期型研修 1 回目を開始した。

表 1 受講生の内訳

	受講生	『いろどり』教授経験有	プノンペン都選択者	シェムリアップ州選択者	2021年度サポートプログラム加入者
日本人	3名	3名	1名	2名	2名
カンボジア人	13名	8名	9名	4名	8名

4.2 研修スケジュール

表 2 は、本研修のスケジュールである。同期型研修の 2 回目、3 回目は対面研修のため、プノンペン都とシェムリアップ州の選択者のスケジュールは一部異なる。同期型研修全 3 回の出席は、受講修了認定の要件としているため、できるだけ受講生の希望に添えられるよう、事前に Google Forms でアンケートを取り、日時を決定した。面談は、主に受講生が作成した『い

表 2 研修スケジュール

プノンペン都選択者		
非同期型	同期型	面談
1回目		
2回目		
3回目		
4回目	1回目(6月16日)	1回目
5回目		2回目
6回目	2回目(7月10日)	
	3回目(7月21日)	
最終課題の提出		
シェムリアップ州選択者		
非同期型	同期型	面談
1回目		
2回目		
3回目		
4回目	1回目(6月16日)	1回目
5回目		
6回目		2回目
	2回目(7月24日)	
最終課題の提出		
	3回目(7月28日)	

ろどり』授業の教案のフォローアップである（表2）。また、必要に応じて本研修に対する不安や疑問点のヒアリングや非同期型研修で行ったクイズの回答に関するフィードバックを一人一人に行った。

4.3 非同期型研修

非同期型研修の目標は、『いろどり』を教えるために必要となる基礎的な知識を養うこととし、全6回行った。

使用する動画は、筆者を含むJFブノンペンが2021年度に制作した動画であり、音声はすべてクメール語で字幕は日本語である。これらの動画は、「いろどり使い方短編動画シリーズ」⁽⁵⁾と「JFT-Basic」の概要動画⁽⁶⁾で、JFブノンペンの公式YouTubeに公開している。「いろどり使い方短編動画シリーズ」は1本あたり約3分でまとめた15本のミニ動画であり、『いろどり』で日本語を教える人のために教材の構成や各活動、各項目の進め方などを説明している（表3）。「JFT-Basic」の概要動画は、JFT-Basicとはどのような試験であるかをまとめた約6分の動画である。

非同期型研修は、1回あたり1時間半の学習時間を想定し、1週間以内に該当の動画視聴（表4）と、理解確認のためのクイズへの回答を必須とした。クイズの数は、「いろどり使い方短編動画シリーズ」では1本あたり3～5問、「JFT-Basic」の概要動画では10問出題をした。

表3 「いろどり使い方短編動画シリーズ」項目立て

「いろどり使い方短編動画シリーズ」15本	
『いろどり』とは	
①『いろどり』の概要	
構成関連	
②各課の構成	
③活動の種類と目標	
すべての活動に共通する進め方	
④Can-doの確認、Can-doのチェック	
⑤導入の質問	
一部の活動に共通する進め方	
⑥形に注目	
⑦ことばの準備	
話す活動	
⑧会話例を聞く (会話スクリプトがない場合、会話スクリプトが本文にある場合)	
⑨話す練習 (モデル会話を聞く、シャドーイング、練習、自由に話す)	
聞く活動（話す活動には含まれていないもの）	
⑩聞く (設定の確認、内容を段階的に理解する、ことばを確認してもう一度聞く)	
読む活動	
⑪読む (設定を確認する、内容を段階的に理解する、大切なことばを確認する、読んだ内容について理解を深める)	
書く活動	
⑫書く (設定を確認する、例を読む、書く、書いたものについてフィードバックをもらう)	
その他	
⑬漢字 (読み方と意味を確認する、文の中で読む、入力する)	
⑭文法ノート	
⑮日本の生活TIPS	

表4 非同期型研修の内容

回	内容
1	「いろどり使い方短編動画シリーズ」①②③
2	「いろどり使い方短編動画シリーズ」④⑤⑥
3	「いろどり使い方短編動画シリーズ」⑦⑧⑨
4	「いろどり使い方短編動画シリーズ」⑩⑪⑫
5	「いろどり使い方短編動画シリーズ」⑬⑭⑮
6	JFT-Basicの概要
Can-do	・『いろどり』に関する基礎的な知識を養うことができる ・『いろどり』を使ってどのように教えるのか、理解できる

4.4 同期型研修

同期型研修の目標は、『いろどり』授業を組み立て、マテリアルを使って効果的に授業が実践できるようになることとし、全3回実施した。1回目はオンラインで行い、日本語教師として授業を実践するために必要となる教案の作り方などの基礎を『いろどり』と引き付けて講義形式で進めた。2回目と3回目はプノンペン都とシェムリアップ州の2拠点に分かれて対面で行い、拠点ごとに更に2つのグループに分かれて『いろどり』授業を実践した。なお、プノンペン都を選択した受講生は10名、シェムリアップ州を選択した受講生は6名である(表1)。表5は、実施内容や実施形態、時間などをまとめたものである。以下で、各回の研修内容について報告する。

表5 同期型研修の内容

回	1回目	2回目	3回目
時間	2時間	3時間	3時間
形態	オンライン	対面	対面
内容	1. Can-do重視の授業とは 2. 『いろどり』マテリアルの使い方 3. 『いろどり』授業の教案の作り方 (初級1 話す活動Can-do04)	1. 『いろどり』授業の教案の作り方 (復習) 2. 『いろどり』授業の実践 (初級1 話す活動Can-do04) 3. 授業の評価(ピア・自己) 4. グループワーク (初級1 話す活動Can-doll, 14, 28から選択)	1. 授業の準備(グループワーク) 2. 『いろどり』授業の実践 (初級1 話す活動Can-doll, 14, 28から選択) 3. 授業の評価(ピア・自己) 4. 研修の振り返り 最終課題について
Can-do	<ul style="list-style-type: none"> Can-doとは何か、理解できる Can-doはなぜ大切か、理解できる 『いろどり』マテリアルの使い方が理解できる 自身の教育現場で『いろどり』マテリアルをどのように使っていくか、イメージできる 教案とは何か、理解できる 教案に何を書くか理解し、実際に書くことができる 	<ul style="list-style-type: none"> 自身が作成した教案をもとに『いろどり』授業ができる 他の受講生の『いろどり』授業を見て、学ぶことができる 『いろどり』の話す活動のポイントが理解できる 自身の『いろどり』授業の改善点を見つけることができる 	<ul style="list-style-type: none"> 他の受講生と協力して『いろどり』授業の実践ができる 前回、学んだことを踏まえて『いろどり』授業の実践ができる
提出物	1. 振り返りアンケート 2. 『いろどり』教案(初級1 話す活動Can-do04)	1. 振り返りアンケート	1. 振り返りアンケート 2. 最終課題(後日提出)

1回目は、日本語教師として授業を実践するための基礎を『いろどり』と引き付けて講義形式で進めた。教案の作り方は国際交流基金(2007:38-58)の授業設計を参考とし、『いろどり』の特徴を理解し、マテリアルを使って効果的な授業ができるようになるために必要とされる基礎的な内容を組み込んだ。なお、受講生の過半数は教案作成が未経験であることが予想されたため、研修前の予習として、当日使用する教案の作り方に関する資料と『いろどり』マテリアル類を各自確認しておくこととした。また、研修終了後は1週間以内に「初級1 Can-do04」を1時間で行う教案を提出する課題を与えた。受講生全員が提出できるよう希望者にフォローアップの面談を行った。

2回目は、受講生が作成した「初級1 Can-do04」の教案をもとに1時間の模擬授業を受講生がグループで担当・分担して実施した。グループは、プノンペン都とシェムリアップ州ともに2つのグループに分け、プノンペン都では1グループ5名、シェムリアップ州では1グループ3名とした。まず、研修ではグループで1時間の模擬授業を実施するために、個人の担当項目を話し合って決めてもらった。次に、個人で作成した教案をグループで擦り合わせ、時間配分などを調整後、使用するマテリアルや機材の確認を行った。模擬授業は、模擬授業を担当する受講生も、自分の担当箇所以外は学習者役になった。模擬授業終了後は、グループで話し合い

をしながら、JF プノンペンが作成した『いろいろり』授業チェックシート(図3)に沿ってピア評価と自己評価を行った。『いろいろり』授業チェックシートとは、星3つで授業を評価するチェックシートであり、日本語とクメール語を併記している。内容は、非同期型研修で学んだことを踏まえ『いろいろり』授業の進め方に関する項目を始め、マテリアルの活用や時間配分などの項目、教師の行動として声の大きさや話すスピードはどうだったかを確認する項目を入れた。

また、そのほかに筆者からも授業のフィードバックを行った。授業の最後に、3回目に行う模擬授業に向けてグループで「初級1 Can-do11、14、28」

の中からCan-do 1つを選定し、1時間で授業が終わるよう個人の担当項目を決めたり授業の組み立てをしたりするグループ活動を行った。なお、「初級1 Can-do11、14、28」を筆者が選定した理由は、1回目で受講生が教案を作成した「初級1 Can-do04」と同じく話す活動であり、構成も似ているため、1回目の経験を踏まえて行うことができるのではないかと判断したからである。

3回目は、2回目の研修でグループごとに選定したCan-doの模擬授業を1時間で行った。実践する前に、使用するマテリアルや時間配分など、グループで最終確認する時間を設けた。模擬授業は、前回と同様、それぞれの担当部分は教師役として授業を実践し、担当以外は学習者役となり進めた。模擬授業終了後は前回と同様、『いろいろり』授業チェックシートをもとにピア評価と自己評価を行い、筆者からも授業のフィードバックを行った。最後に、約2か月間の研修のふり返りを行った後で、本研修の最終課題について説明した。最終課題は、本研修で学んだことを踏まえ、受講生の教育現場に合った『いろいろり』授業の教案を提出することである。教案は、「初級1 Can-do11、14、28」の中から本研修で実践していないCan-doを受講生が選定することとした。なお、同期型研修の目標を達成するために、最終課題は受講生の教育現場に合わせた授業を組み立てる必要があると判断し、提出する教案で想定する授業時間は受講生に委ねることとした。

「いろいろり」授業見学チェックシート ទំព័រពិនិត្យការស្រាវជ្រាវ "irodorri"		年 月 日 先生
<いろいろり> <irodorri>		
最初にCan-doの確認はできているか 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
活動前の導入の質問は適切か 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
場面設定の確認はできているか 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
問題文の説明は適切か 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
「影に注目」では一方的に説明するのではなく、学生の気づきを促したか "ការផ្ដោតលើទម្រង់" ជាជាងទម្រង់ទៅសិស្សអោយសិស្សឱ្យកត់សម្គាល់ឬទេ?	★★★	
「文法/ノート」は適切に活用できているか 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
会話練習指導は適切か 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
シャドーイング指導は十分か 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
最後にCan-doの確認とチェックはできているか 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
<基本動作> <ប្រតិបត្តិការជាមូលដ្ឋាន>		
音声は十分活用できているか 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
母語は適切に活用できているか 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
指示は的確にできているか 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
意図をもって回答者を指名しているか(満遍なく指名する/質問難易度によって回答者を選択する等)必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
教材/教具は活用できているか 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
ホワイトボードの活用は適切か 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
学習者への対応は十分か 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
会話の代入練習の指示は明確か 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
ロールプレイ前の学習者の準備は十分か(学習者はロールプレイの設定や読象選択を理解して臨んでいるか)必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
時間配分は適切か 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
教室内の机間巡回は適切か 必ずしも確認できなくてもいいCan-doはありますか?	★★★	
<パフォーマンス> <ការសម្រប>		
声の大きさ/話す速さ/発話の明確さは適切か តើកម្រិតសំឡេង / ល្បឿននិយាយ / ការច្បាស់លាស់នៃការបញ្ចេញសំឡេងត្រឹមត្រូវទេ?	★★★	
学習者を引きつけ飽きさせない授業を実施できているか តើអ្នកអាចផ្ដោតមុខរបស់អ្នកសិស្សឱ្យកត់សម្គាល់បានទេ?	★★★	

図3 『いろいろり』授業チェックシート

5. 第1期A研修実施後の考察

本研修は2022年7月31日に終了し、受講生全員が受講修了要件を満たした。本章では、まず受講生の課題への取り組みや、アンケートへの記述などから非同期型研修と同期型研修でそれぞれ設定していた目標がどの程度達成できたかを考察する。また、本研修の終了後に行ったふり返りアンケートの結果をもとに、研修の成果について考察する。

5.1 非同期型研修

非同期型研修の目標は、『いろどり』を教えるために必要となる基礎的な知識を養うことである。そのため、動画視聴後に回答するクイズは、複雑な内容ではなくきちんと視聴していれば回答できる基礎的な内容とした。結果として、受講生全員が正答率80%以上であり、目標が達成できたと言えるだろう。以下は、毎回クイズの最後に設けた代表的なコメントである。クメール語で書かれていたものは一部翻訳した。

- ・動画の説明がわかりやすく、ちゃんと視聴すればすべてのクイズに回答できる。
- ・自分が日本語を初めて勉強した時は書くことと読むことから始まったが、勉強するにつれて聞くことと話すことの方が重要ではないかと思っていた。動画の視聴から『いろどり』は聞いて話すことを中心に授業を進めていくことがわかり、共感した。
- ・クイズの文章で難しい漢字にふりがなが付いていれば、クメール語の文章がなくても日本語を読んで答えるカンボジア人教師が増えるのではないか。
- ・もう少しクイズの数を増やしてもいい。
- ・『いろどり』を動画で勉強した後で「JFT-Basic」の動画を見たのがよかった。『いろどり』の復習にもなった。

上記のような具体的なコメントから、動画視聴をクイズに回答する流れで行う研修の有効性が確認できた。また、受講生が今まで体験してこなかった課題遂行型の授業がイメージできたことが窺える。また、講師である筆者もクイズを通して受講生の理解度だけではなく研修で感じたことや考えていることが把握できたことにより、同期型研修や面談がより円滑に進められたと感じる。その一方で、正答率が低かったクイズに関しては、受講生の理解度を把握するほか、筆者が作成したクイズの文言や動画の内容を再考する必要があるだろう。

5.2 同期型研修

同期型研修の目標は、『いろどり』授業を組み立て、マテリアルを使って効果的に授業が実践できるようになることである。毎回、研修終了時にふり返りアンケートを行い、受講生全員から回答が得られた。質問項目は以下の通りである。

- ・本日の研修の満足度（5段階）とその理由（記述式）

- ・ Can-do 重視の授業について理解できたか（5段階）
- ・ 『いろどり』の材料について理解できたか（5段階）
- ・ 1番使ってみたい材料は何か（選択式）
- ・ 教案について理解できたか（5段階）
- ・ 授業の実践では、『いろどり』が目指す授業ができたか（3段階）
- ・ 作成した教案の通りの授業ができたか（3段階）
- ・ あなたが目指す『いろどり』授業は何か（記述式）
- ・ その他のコメント（記述式）

表6の通り、同期型研修の満足度は「どちらでもない」以上の回答が大部分を占め、受講生から一定の評価が得られたと言える。

表6 受講生16名の同期型研修の満足度

	とても満足	まあまあ満足	どちらでもない	あまり満足しない	満足しない
1回目	33.3%	60%	7.7%	0%	0%
2回目	43.8%	50%	7.2%	0%	0%
3回目	84.6%	15.4%	0%	0%	0%

ただし、1回目の内容に「とても満足」した受講生は少なかったことがわかる（表6）。その理由として、教案に関する講義は、筆者が予想していた以上に受講生にとって心理的負担が大きかったことが挙げられる。例えば、教案について理解できたかという問いに対して、あまり理解できなかつたと4名が回答していた。また、講義の中で受講生から「どの程度、詳しく教案を書けばいいかわからない」、「教案を書く時間がない」という声が挙がった。その一方で、自由記述の中で「教案を書くことで頭の整理ができると思う」、「教案の例をもらったので、それを参考にしながら作成することができると思う」等の肯定的なコメントもあり、未経験のことに対する捉え方が受講生によって異なっていたことが考えられる。しかし、『いろどり』のCan-do重視の授業について理解できたか、材料について理解できたかという問いに対して、受講生全員が「だいたい理解できた」以上の回答をしており、『いろどり』授業を効果的に実践するための基礎的な知識を養うことができた、受講生が考えていることがわかった。

2回目と3回目は、受講生が作成した『いろどり』教案を用いて模擬授業を行った。教案があることで、1時間という決まった時間の中でどのように授業を進めていくのかという時間配分や押さえないポイントを事前に整理できること、授業中に行う時間調整等にも対応ができることを体験してもらった。ふり返りアンケートでも複数の受講生が「教案の大切さを改めて理解できた」、「教案のおかげでCan-doから離れないで授業が実践できた」とコメントを残していることから、教案作成から授業実践の流れを体験したことで心境の変化があったことが窺える。また、カンボジア人の受講生からは「日本人教師の授業を見ることは、普段できないことなのでとても面白く、色々な気づきがあった」というコメントもあった。

3回目の満足度が高かったこと(表6)の理由としては、本研修の集大成として学んだことを生かして『いろどり』授業が実践できたという充実感が窺える。ふり返りアンケートでも「前回の反省を生かしてマテリアルを使った授業ができた」、「色々な受講生の授業のスタイルが確認できて面白かった」、「講師の先生に自分の授業をクメール語でもフィードバックをもらったのが良かった」等、肯定的なコメントが多くあった。その他、筆者らが日本語とクメール語で全体に共有しながら受講生一人一人の授業に関するフィードバックを行ったことも受講生の満足度に繋がったこともわかった。以上のように、ふり返りアンケートの結果から受講生は、3回の同期型研修を通して日本語教師としての基礎となる教案の作り方や授業の組み立て方などを学びながら、『いろどり』授業の実践ができたと考えたことがわかった。

5.3 本研修全体に関するふり返りアンケート

本研修終了後に行った全体に関するふり返りアンケートは、受講生全員から回答が得られた。本節では、研修全体に関する評価をアンケート結果と自由記述から確認する。以下は、代表的な質問項目である。なお、質問項目は日本語とクメール語で記述した。

- ・全体として、本研修に参加してよかったか(5段階)とその理由(記述式)
- ・非同期型研修は、本研修の目標を達成する上で効果的か(5段階)とその理由(記述式)
- ・Zoomによる同期型研修は、本研修の目標を達成する上で効果的か(5段階)とその理由(記述式)
- ・対面による同期型研修は、本研修の目標を達成する上で効果的か(5段階)とその理由(記述式)
- ・本研修の修了要件は適切か(5段階)
- ・本研修で何が1番役に立ったか(選択式)とその理由(記述式)
- ・本研修受講修了者を対象にB研修を行う予定だが参加する意思があるか(3段階)
- ・今後の『いろどり』授業の目標は何か(記述式)
- ・その他のコメント(記述式)

表7 全体として、本研修に参加してよかったか

そう思う	まあそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	そう思わない
87.5%	12.5%	0%	0%	0%

全体としての満足度は「まあそう思う」以上の回答を占め、一定の評価が得られたと言える(表7)。また、本研修の目標を達成するために非同期型研修、同期型研修はそれぞれ効果的かという項目では、89%の人が「まあそう思う」以上の回答だった。このことから研修形態についても一定の評価が得られたことがわかる。

以下に、本研修の目標と特に関連がある質問項目の回答の一部を取り上げ、良い点と悪い点

を挙げる。なお、クメール語で書かれていたものは一部翻訳した。

<全体として、本研修に参加してよかったか>

(良) 教案の書き方と『いろどり』の教え方の順番をよく勉強することができた。今まで単発のセミナーはあったが、約2か月間の研修は初めてのことで、教師間の意見交換や交流ができて良かった。

(悪) なし。

<非同期型研修は、本研修の目標を達成する上で効果的か>

(良) 『いろどり』の全体の内容と、進め方が理解できた。動画の内容を思い出しながら同期型研修で実践したり講師の先生から解説があったりしたので、理解が深まった。

(悪) 既に知っている情報が多かった。忙しい中で視聴するのが大変だった。

<対面による同期型研修は、本研修の目標を達成する上で効果的か>

(良) 他の受講生の教え方を学んで理解することができた。教案をもとに授業を実践することで良い点、修正すべき点を受講生や講師の先生と直接話し合えるのは良い。

(悪) 日本人教師とカンボジア人教師が対面で一緒に研修することは良さもあれば不都合な部分もある。

<Zoomによる同期型研修は、本研修の目標を達成する上で効果的か>

(良) 忙しい人や違う所にいる人たちが集まる場所としてZoomは便利で役に立つ。

(悪) 電波の問題が心配だった。

この他にも受講生一人一人の気づきや反省等が多く書かれており、本研修に対して主体的に捉え、真摯に向き合って受講していたことが読み取れた。また、受講生16名のうち2021年度に実施したサポートプログラムに加入していた受講生は10名いる(表1)。本研修の内容は、サポートプログラムで既に扱った内容も一部含まれていたため、一部の受講生の満足度が低かったことがわかった。一方、サポートプログラムに未加入かつ『いろどり』初心者の教師からは、サポートプログラムで行っていた体験授業を組み込んでほしかったというコメントがあり、双方の受講生が有意義に学べるよう研修内容を再考する必要性を感じた。

6. まとめと今後の課題

本稿では、JF プノンペンのこれまでの『いろどり』に関する活動をふり返ったうえで、第1期A研修の実施について報告した。また、受講生が研修目標をどの程度達成したと考えているのかを、ふり返りアンケートの記述などから考察した。第5章で記述した通り、受講生は非同期型研修と同期型研修の複合型の研修を通して、『いろどり』で日本語を教えるために必要とされる基礎的な知識を養い、授業を実践する力をつけることができたと考えたことがわ

かった。また、受講生16名のうち、2022年8月15日から開講する第1期B研修(図2)を受講するのは13名である。13名の受講生に対しては引き続きB研修を通してフォローアップを行うとともに、受講表明がなかった3名についても引き続きコンタクトを取っていききたい。

なお、A研修、B研修は2期の実施を予定している(図2)。2期ずつ実施することにより『いろどり』研修の全体像や効果、改善点が見えることを期待するとともに、全日程終了後に全体としての達成度や講師の視点から見た教案の分析、授業実践の達成度等を踏まえた考察を別稿にて報告したい。

最後に、JF プノンペンとしても一定の期間で行う教師研修が初めてでありながら、受講生全員が離脱することなく受講修了要件に達したことは大きな成果であり、カンボジア国内の日本語教師が学ぶ場を必要としていることを改めて確認できる良い機会となった。受講生が『いろどり』教師研修を通して自信を持って日本語教育ができ、教えることの楽しさややり甲斐を見つけることで、将来的にカンボジア国内の日本語教師を牽引する存在となることを望んでいる。

[注]

- ^①『いろどり 生活の日本語』は、国際交流基金が2020年3月にウェブ上で公開した日本語教材であり、「入門(A1レベル)」、「初級1(A2レベル)」、「初級2(A2レベル)」の3部からできている。また、特定技能制度などで来日する外国人が、日本で生活や仕事をする際に必要となる基礎的なコミュニケーション力を身につけることを目的としている。
- ^②「特定技能」外国人材向け日本語事業の取り組みに関する詳細は、以下のページに公開されている。
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/ssw/index.html>> (2022年8月25日)
- ^③以下のページに公開している。
<<https://onl.sc/w5jDkK2>> (2022年8月25日)
- ^④オンラインでの授業見学は、機関が使用しているWeb会議システムに従って行った。
- ^⑤動画は、『いろどり』の各課の構成や4つの活動に共通する進め方、一部の活動に共通する進め方、活動ごとの進め方を踏まえて15本で構成した。なお、動画の項目順は、授業の構成や順番とは関係ない。15本の動画は、JF プノンペン公式 YouTube 内の以下のページに公開している。
<<https://youtube.com/playlist?list=PLQSZ7ToXZ9JLvEMOuxYTjHnedcmBeaZhh>> (2022年8月25日)
- ^⑥JF プノンペン公式 YouTube 内の以下のページに公開している。
<<https://youtu.be/SV4gVhYzLSw>> (2022年8月25日)

[参考文献]

- 国際交流基金 (2007) 『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 第9巻 初級を教える』、ひつじ書房
国際交流基金 (2014) 『まるごと 日本のことばと文化』(初級2 A2 かつどう)、三修社
国際交流基金 (2014) 『まるごと 日本のことばと文化』(初級2 A2 りかい)、三修社
国際交流基金「日本語教育 国・地域別情報 カンボジア (2020年度)」
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2020/cambodia.html>>
(2022年8月10日)
国際交流基金プノンペン連絡事務所「『いろどり 生活の日本語』クメール語版」
<<https://pp.jpf.go.jp/tobira/learner/>> (2022年8月25日)